

マウマウの宣誓をめぐる語り

－1950年代のケニアで行われた儀式の噂－

The Narratives about the Mau Mau Oaths - The Rumors of the Rituals in Kenya in the 1950s -

松岡 陽子

愛知みずほ大学人間科学部

Yoko MATSUOKA

Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

Abstract

The Mau Mau, the insurgent group, is famous for the struggle for independence in Kenya. It consisted of the three tribes, the Kikuyu, the Embu and the Meru. The Mau Mau had expanded rapidly from the late 1940s to the early 1950s by performing its original oaths. The British colonial government issued an emergency declaration in 1952 and started the Mau Mau war. The two contradictory discourses about the oaths have come up since the war. One is that the oaths were bestial; the oath takers in the rituals had intercourse with women or animals, licked the blood of women's menses, killed persons as sacrifices and so on. The other is that the Mau Mau never performed such oaths as above, they say there are no evidences and they were just rumors. Which is true?

In this paper, I will take up the rumor over the Mau Mau oaths and then focus on the narrative of my informant who took the Mau Mau secret oaths. The Mau Mau war has been discussed mainly from viewpoints of the Kikuyu and the colonial government. However, what happened to the Embu during the war was not necessarily the same as the Kikuyu. I will try here to give a new perspective by reviewing the circumstances in Embu at that time.

キーワード：ケニア；エンブ；マウマウ戦争；宣誓；儀式

Keywords: Kenya; Embu; the Mau Mau war; oath; ritual.

はじめに

ケニアの歴史において、1950年代のマウマウ戦争ほど有名なものはない。反政府組織マウマウは白人に土地を奪われたキクユ人、そして土地はほとんど奪われていないもののキクユから影響を受けたエンブ人、メル人などによって構成されており¹⁾、この3民族はイギリス植民地政府に特に警戒された。マウマウは独自の宣誓儀式を行うことによって、仲間を増やし、連帯を強化してきたが、その内容が「野蛮」なものだと戦時中から批判されてきた。マウマウ運動がきっかけとなり、ケニアは1963年にイギリスから独立したが、その後もマウマウの評価は変わらず低いままであった。しかし一方でマウマウに対する再評価を求める声が少しずつ出現し、特に2003年にケニア政府がマウマウの非合法を取り消すと、マウマウは植民地政府に逆らった反乱分子から一躍国の英雄として扱われるようになった。これに関連して、これまでのマウマウの宣誓儀式の評価も不当なものであり、それらは事実に基づくものではないとして論じられるようになった。

マウマウの宣誓儀式はその秘匿性ゆえに事実確認が困難であったが、筆者の調査地エンブでは、人びとが宣誓儀式について躊躇なく語ることが多い。噂は単なる風評か否か。本論ではその真偽について追究するとともに、噂に関する相反するディスコースが出現した背景について論じる。

なお、マウマウという名称は植民地政府の勘違いからついたものだが、広くその名前が定着していること、「マウマウ」に代わる組織の総称がないことから、当時の反政府組織を「マウマウ」と呼び、また1940年代後半から見られた関連の反政府運動を「マウマウ運動」、植民地政府が宣言した非常事態期間(1952-1960年)をマウマウ戦争とみなす。

1. マウマウの宣誓儀式の噂

20世紀、イギリス植民地下のケニアではキクユ人を中心とした反政府運動が活発化していた。彼らの大きな不満の一つはホワイト・ハイランドと呼ばれる広大かつ豊かな土壌である土地を白人占有地とされ奪われたことだった。土地を喪失したことによって従来の生活スタイルを維持できなくなったキクユ人はさまざまな政治結社を結成し、植民地政府に抵抗していた。なかでも運動が最も急進的で広範囲に拡大したものがマウマウ運動である。マウマウは各地で暴動を起こしていたが、当時のケニア総督フィリップ・ミッチェル卿(在任1944-1952年)は事態を無視していたため、マウマウの活動は勢いづいていく一方であった。

非常事態宣言が発令されたのはミッチェル卿が退任し、新総督エヴリン・ベアリング卿(在任1952-1959

年)が着任してすぐのことである。1952年10月初め、植民地政府の強力な支持者であるセントラル州のパラマウント・チーフ(アフリカ行政官)ワルヒウがマウマウに暗殺されたことをきっかけに、非常事態宣言が発令された。この時、マウマウとみなされる大勢のリーダーが逮捕されたが、その中には後のケニア初代大統領となるケニヤッタも含まれていた。一斉逮捕の時、内通者よりいち早く情報を受け取っていたマウマウたちは森に逃げ込み、そこを拠点にゲリラ戦を展開するようになった。アバーデア山地にはスタンリー・マゼンゲやデダン・キマジらが、ケニア山にはチャイナ將軍ことワルヒウ・イトテたちが拠点を置き、戦闘態勢を築いた。キクユ人を中心に構成されていたマウマウはケニア山麓に拠点を移したことで、近隣住民であるエンブ人とメル人の協力を求めるようになり、最終的にマウマウのメイン構成はキクユ、エンブ、メル人の3民族となった。体勢を立て直したマウマウは数年は勢いづくも、すぐに植民地政府がとった「新村計画(villagesation)」²⁾というゲリラ封じの大規模作戦に苦戦し、次第に勢力が弱まっていった。1956年、マウマウで最も有名なリーダー、デダン・キマジが逮捕、死刑に処されたことで、マウマウの多くが戦意喪失し、山を下りて投降する者が増えた。植民地政府は1960年に非常事態を解除し、マウマウ運動を封じ込めることには成功した。しかし戦争に費やした財政負担が大きかったこともあり、イギリスは植民地支配を放棄し、1963年にケニアは独立した。

独立後、初代大統領にケニヤッタ(在任1964-1978年)が就任し、ケニアは新しいスタートをきった。しかし独立に影響を与えたマウマウはその後合法化されず、ケニヤッタに希望を見出していた元マウマウ戦闘員たちを大いに失望させた³⁾。マウマウに関する語りも途切れることはなく、特に宣誓儀式に関する噂は不気味なものとして語られ続けていた。その噂のもとになったのは当時の植民地政府のディスコースであり、行政文書においてそれを確認することができる。それによると、マウマウの宣誓儀式では儀式の受け手が女性の経血を飲んだり、月経期の女性と性交したりした。また獣姦、人身供犠なども指摘されており、衝撃的な内容としてとりあげられている。特に「マウマウ宣誓儀式の覚書」⁴⁾は冊子となっており、当時関係者に配布されたと考えられる。そこに記載されている一例にナイバシャで実施された宣誓儀式があげられており、マウマウ戦闘員たちは隊長→少佐→大佐→准将→將軍と階位をあげるごとに儀式を受けていた。宣誓儀式の内容は下記のとおりである。

(1)隊長になるための宣誓：死者の目を7回つつき、

死者の右手の指を7回折る。

(2)少佐になるための宣誓：死者の頭を7回噛み、食べる。

(3)大佐になるための宣誓：女性の経血を7回飲む。

(4)准将になるための宣誓：死んだ白人の頭を7回噛み、食べる。

(5)将軍になるための宣誓：月経期にある女性の尿を7回飲み、死者の左手の骨をねじり折り、排泄物と土と血を混ぜ合わせたものを7回飲む。

マウマウの宣誓儀式は当時イギリス本国でも大きな話題として騒がれ、社会人類学者であるマックス・グラックマンもこの問題をめぐって、『マンチェスター・ガーディアン』紙のなかで、フィリップ・ミッチェル卿と論戦を展開している。ミッチェル卿はケニア各地でマウマウによる暴動が起きていたにもかかわらず、それを無視して本国に帰国した元ケニア総督であるが、彼は記事の中ではマウマウを野蛮な先祖がえり、かつ宗教的なものと主張した⁵⁾。それに対してグラックマンはマウマウの存在自体を植民地政策の産物とみなし、ミッチェル卿の意見を否定したうえで、なぜマウマウがそのような儀式を実施したかが問題だと主張する⁶⁾。複数回にわたって大きく論戦が記事で掲載されたこと自体、どれほどマウマウの宣誓儀式がイギリスでも関心が高かったかがわかる。

戦後もこのようなマウマウの宣誓に関する噂が絶えなかったが、後に噂されているような事実はないとみなす意見が出現するようになった。キクユ人でマウマウの宣誓儀式を受けた経験をもつカリウキは女性の経血が神聖視されるのは、しかるべきリーダーによる割礼の儀式の時であり、その誤用は不妊やそのほかの禍をもたらす罪となると指摘し、マウマウの宣誓にまつわる噂はいずれも偽りであると反論した⁷⁾。ケニア山を統括したチャイナ將軍ことイトテも、キクユでは他者の血が自分に付着することを忌み嫌い、人間の血を儀式に用いることなどありえないと指摘する⁸⁾。イギリスの社会人類学者ラ・フォンテインは噂の情報源となった多くは投降したマウマウ戦闘員の告白の、その伝聞であり、しかもその告白は重刑を免れるためにつかれた嘘であるとみなす。彼女は戦闘員たちのそのような告白の信憑性を否定したうえで、マウマウの宣誓にまつわる言説は世界各地の秘密結社につきものの風評であり、憶測が助長されただけにすぎないとみなした⁹⁾。

2. 2000年代のマウマウ・フィーバー

ケニヤッタの死後、第2代大統領となったカレンジン出身のモイ（在任1978-2002年）の政権でもマウマウ

ウが合法化されることはなかった。公然とマウマウを肯定して語ることは許されず、元マウマウ戦闘員たちの不満は鬱積していた。モイの長期政権が終わり、2002年にキクユ出身のキバキが第3代大統領（在任2002-2013年）に就任すると、ようやく合法化され、マウマウは一躍ケニアを独立に導いた国の英雄となった。キバキはマウマウのリーダーとみなされたデダン・キマジの銅像をナイロビの中心地に国費で建て、ライバル民族であるルオなどの冷やかな態度を無視して、自民族キクユ人を喜ばせた。各マスメディアが競ってマウマウを題材に報道するようになると、ケニア国内ではマウマウ英雄論が盛んに取りざたされるようになった。筆者は2002年から断続的にケニアで調査をしているが、合法化された頃のマウマウを語る人びとの興奮は相当なものがあつたように記憶している。調査地でも当時の状況について知ろうとすると、尋ねていないにもかかわらずマウマウがいかに素晴らしいのか語り、自分自身もその運動に命がけてその身を投じたと言った。特に男性が我こそは英雄と言わんばかり筆者に自伝を語りかけてきたが、しかし時間をかけて一つ一つ事実確認をしながら過去のことを引き出していくと、途端に彼らの口は重くなった。そしてある程度話し終わると、その記憶は彼らにとって思い出したくなかったはずの過去であったことを彼らは思い出すのである。

このマウマウ・フィーバーとも言うべき現象は世界各国でマウマウについて報道されたこともあり、ケニア国外でも話題となった。当然日本でも話題になったが、大きくマウマウ・フィーバーの影響を受けたものも見られ、その一例が石井の論文である。石井は植民地政府の行政文書とマウマウ側についたキクユ人の語りを比較し、植民地政府が一方向的にマウマウを非道な存在として扱っていることを指摘している。「古老の語りや後の研究からは、土地自由軍 [=マウマウ] が人間の耳を切断したり、老人や女性、子供という社会的弱者を率先して抹殺したという事実は見あたらなかった。むしろ読みとるべきは、マウマウの非道さが一方向的に語られたことであろう」〔括弧内は著者注〕と論じた¹⁰⁾。しかしこれは事実を無視した議論である。マウマウは敵とみなした相手には容赦はなく、性別、年齢に関係なく殺害していた。また、アフリカではマウマウに限らず肢体を切断する殺害方法はよく見られ、マウマウがそのような殺害方法をとっていても驚くようなことではない。

例えば、マウマウが起こした事件の中で最もセンセーショナルな事件の一つにラック一家虐殺事件がある。ラック一家は南キナンゴップを拠点とした白人農場主であり、夫婦の間には5歳の子供がいた。夫人は医者

でアフリカ人を含むすべての雇い人に無料で治療を施していたが、雇い人に裏切られ、一家は1953年1月24日夜に待ち伏せしていたマウマウによってパンガで滅多切りにされた¹¹⁾。また、1953年3月の「ラリ村の虐殺」では植民地政府に親和的であったラリ村の人びとがマウマウの急襲を受け、その場にいた村人全員が虐殺された。殺害された多くは女性や子供であり、彼らの肢体はバラバラに切断されていた。この事件はその2日後に英語、スワヒリ語でケニア国内に報道され、多くの人びとが知るようになった。このようなマウマウによる虐殺事件は続き、非常事態宣言から比較的早い時期からマウマウは「残酷な野蛮人」というイメージが定着した¹²⁾。

これらの事例からみても、マウマウは敵とみなした相手には決して容赦することがなかったことがわかる。それは筆者の調査地から得られた現地の語りからも同様のものが採取できており、マウマウは敵であれば家族も殺すように指示していたことがわかっている。

また、石井はマウマウが実施していた宣誓儀式は恐怖を仰ぐものではなく、植民地政府が現地社会の慣習や人びとの宗教観を顧みていないと論じた¹³⁾。しかしこれも間違いであり、マウマウの宣誓は人びとを脅すことから始まる。儀式を受けた具体的な経緯を尋ねると筆者の調査ではほとんどのインフォーマントが無理やり儀式を受けさせられていたことを告白しており、マウマウの宣誓に関して多くの住民から苦情があったとする当時の植民地政府の文書はおそらく事実を記しているものと考えられる。マウマウにとって一人でも多くの人間を自分たちの協力者にすることは切実かつ重要な問題であり、それは戦いの勝敗に直結することであった。脅迫は人びとに宣誓を受けさせる第一段階として一般的に行われており、当然儀式の内容もその延長で実施されている。

マウマウ運動はある視点からは、支配されていた側が協力しあって強大な植民地政府に立ち向かったという物語として見ることができる。マウマウ・フィーバーはまさにそのような物語に沸き立つ盛り上がりであった。これに乗じてマウマウの活躍をケニア独立の貢献者として描く記述が増えたが、筆者が調査で出会った人びとのほとんどは理想をもってマウマウに加入した者はいなかった。マウマウ・フィーバー最中の調査であったため、マウマウについて話を聞きたいと尋ねると、インフォーマントたちは意気揚々として最初は語ってくれる。しかし個人のライフヒストリーに迫っていくと、世間に受け入れられそうな差し障りのない部分はすぐにでも語ってくれるが、肝心な部分を聞き出そうとすると、彼らは嘘やごまかし、拒絶で語りを煙に巻こうとする。一度には話を聞くことはできな

かったが、ケニアで長年調査を続けていると、少しずつ語りが蓄積されるようになった。半世紀前のことであるため、その時代を知るインフォーマントたちは筆者が調査地を訪ねる度に少なくなっていくが、それでも彼らの語りから見えてきたものは大きな物語とは異なる別の物語であった。

3. エンプのマウマウ運動参加

筆者の調査対象であるエンプはマウマウ戦争の中心となったキクユの隣接民族である。エンプもキクユ同様、全民族がマウマウ戦争に巻き込まれた。若い男性のほとんどは逮捕され、刑務所や勾留キャンプに送られた。そこでは拷問とも言える待遇を受け、多くの人びとがそこで亡くなった。村に残った女性、子ども、高齢の人びとは「新村」という要塞化したムラに移住させられ、マウマウから人びとを保護するという名目で植民地政府の直接の監視下に置かれた。「新村」は生活するうえでの必要なネットワークもサービスもなく、人びとは非常に貧しい生活を余儀なくされ、特に高齢者や子供の多くが栄養失調等で亡くなった。戦争が続く限り希望はなく、人びとはとにかく早くこの戦争が終わることだけを望み、当時のエンプの人びとにとって、1950年代はつらく苦しい時代だったと言える。

そもそもマウマウ運動はエンプ人自身が自発的に起こしたのではない。エンプは1906年にイギリスに屈服して以来、目立って反抗的な態度を植民地政府に見せたことはなく、それ以降はむしろ良好な関係を維持していたと言えよう。長老など伝統的権威は植民地政府の威光を借りることで、自らの権威を強調でき、また政府はある程度の自治を伝統的権威に任せておくことで社会秩序を維持できた。政府は他民族には許可しなかった換金作物であるコーヒーの栽培権をエンプでは認め、農業政策において優遇していた。もちろんエンプ社会において植民地政府に対する反発が全くなかったわけではないが、植民地支配が確立されてから政府に反発する政治結社が一つもエンプ社会では育たなかったことをみると、両者は比較的うまくつきあっていたと言えるだろう。

矛盾しているが、植民地支配以降、エンプ独自の文化が崩壊していくことを恐れたのは、実はイギリス人行政官であった。特に1930年代のエンプ県知事であったランバートは「伝統」の復活に尽力したが、彼の努力もむなしくエンプ独自の慣習は廃れていった¹⁴⁾。「伝統」行事を引き継ぐ若者たちが外の世界に興味を持ち始めたからである。1940年代になると、長老たちや親たちが若者たちの行動をコントロールできなくなっているという不満が聞かれるようになった。親の許可なく勝手に家を離れ、出稼ぎに行くこともあった。

またヨーロッパ流のダンスが広まると、彼らはエンブのアイデンティティであり、戦士の誇りであった「伝統的」ダンスへの関心をなくすなど、若者たちはエンブ独自の規律やモラルに追従しなくなっていた¹⁵⁾。マウマウ運動がエンブ社会に押し寄せていたのはまさにこのような時期だったのである。

マウマウ運動は土地を奪われたキクユ人の不満が動機となったが、エンブやメルは白人に奪われた土地はほとんどなかった¹⁶⁾。それゆえこの2民族がマウマウ運動に加担した理由が不明とされたが、少なくともエンブでは人びとがマウマウの政治理念に賛同して加入したわけではない。マウマウ運動に興味をもたない者たちを仲間にする方法はすでにマウマウ内で確立されていた。無理やりマウマウが用意する宣誓儀式を受けさせれば、受けた者は必ずマウマウの指示に従う。マウマウが急速に拡大することに成功したのはこの宣誓儀式ゆえである。宣誓儀式はアフリカ人独自の呪術的世界観の中で展開されるため、儀式で誓った内容を破った場合、本人や家族に死や事故などの不幸が訪れると信じられている。それゆえ宣誓儀式でマウマウに従うと誓った以上、それに反する行為をした場合、その後の末路を人びとは恐れるのである。儀式のその力は死ぬまで有効であり、それゆえに戦争が終わり、それから長い時間が経った現在でも儀式を受けた人びとは宣誓の内容について固く口を閉ざす。キクユ社会で精力的に戦争体験者の語りを収集し、ピューリッツァー賞を受賞したアメリカ人歴史家エルキンズですら体験者から宣誓儀式の内容について教えてもらうことはかなわなかった¹⁷⁾。

マウマウの宣誓儀式を受けることで人びとを精神的にマウマウに拘束させてしまうその特性を危険視した植民地政府は1952年4月からキクユ人の慣習に詳しいリス・リーキーの助言に基づき、マウマウの宣誓に対抗する「浄化の宣誓(cleansing oath)」を開始した。これは人びとが宣誓によって受けたその拘束力を呪術的な力でもって解除させる儀式であり、当初かなりの効果をあげたようである。しかし逆に浄化の宣誓を受けた者たちは再びマウマウの宣誓を何度も受けさせられることになり、結局この儀式はマウマウの宣誓が各地に伝播していくことを阻む決定的なブレーキにはならなかった¹⁸⁾。

マウマウ運動に巻き込まれた人びとは最初は無理やり宣誓儀式を受けさせられるが、しかし植民地政府から弾圧を受け続けることで、徐々にマウマウ内で結束し、弾圧に比例するようにキクユ社会におけるマウマウ運動は盛んになっていった。マウマウはキクユ社会で成功したこの手法をエンブにも適用したのである。

非常事態宣言以降にマウマウが拠点にした森は人が

住むには過酷な環境であり、食料や武器の補給、情報の収集等、彼らを後方支援してくれる者たちが必要であった。森を囲んで居住していた人びとの協力はマウマウにとって必須であり、それゆえ精力的にエンブ各地でマウマウの宣誓儀式を乱発したのである。

4. エンブ社会におけるマウマウの宣誓儀式

最も早くマウマウに加入したエンブ人は当時ナイロビに出稼ぎに行っていた者たちである。マウマウ運動が盛んであったナイロビで、多くのエンブ人がキクユ人とともに脅されてマウマウの宣誓儀式を受けた。彼らはそのうちナイロビを去り、実家のエンブに戻っていった。しかし彼らは既存社会に馴染めず、なかには森に住みつく者もいた。エンブの森に住む者たちは当時エンブ語で「森の少年(*ivĩci cia mutitũ*)」と呼ばれていた。彼らは時々、森を下り、食料を求めて麓の親類や知り合いを訪ねていた。食事を提供していた当時の女性たちは森の少年たちが何をしているのか全く知らなかったが、顔見知りのよしみでもてなしていた。彼らがマウマウだとエンブの人びとが認識するようになったのは、植民地政府がエンブ社会でも取り締まりを行うようになった非常事態宣言頃である。

メルのマウマウ運動を論じるカムンチュルーもマウマウに率先して加入していた者たちはナイロビから帰還してきた若者たちで、伝統社会になじめず、仕事や税金、犯罪から逃げてきた者たちだったと指摘している¹⁹⁾。当時のマウマウは若者を中心として組織された新興勢力であった。アンダーソンもマウマウは多くの若い「ならず者」を抱えており、彼らはマウマウの権威を笠に人びとに脅迫や暴力を加えたり、宣誓料を横領したりしていたことを指摘している²⁰⁾。つまり、初期の頃のマウマウは既存社会に反発する若者を吸収するかたちで大きくなっていったと言えるだろう。彼らはマウマウ運動の理念のもと、年長者や伝統的権威に対しても暴力を厭わず、自分たちに従わせようとしたのである。社会的周辺に追いやられていた者がマウマウ運動に便乗することで簡単に権威をもつことができた。それは特にマウマウの宣誓儀式で発揮されたのである。

エンブ社会における宣誓儀式の乱発は、先にナイロビ等で宣誓儀式を受け、マウマウに加入していた若者たちが案内人となった。マウマウのリーダーたちは覆面し、人物を特定することができないようにしていたが、彼らの語る言葉がエンブ語以外にキクユ語、メル語が話されていたことから所属民族は明らかであった。エンブ社会の人びとを仲間に取り入れることはマウマウ全体の問題であり、3民族協力して宣誓儀式を執り行っていたのである。ただし宣誓の文句はキクユ語で

行われ、マウマウ内部でもキクユの優位性が見られたようである。

儀式は政府側に見つからないよう夜に実行されることが多く、村中のエンブ人が強制的に連行された。もちろんマウマウを知らない多くの村人たちが反発したが、マウマウは有無も言わず連行し、逆らう者には暴行を、それでも反発する者は容赦なく殺した。それは彼らが連行された儀式場でも見られ、到着するなり彼らが見たものは死体の山積みであった。殺された多くがプロテスタント系キリスト教徒であり、彼らは教会より宣誓を受けることを固く禁じられていた。儀式場の横に死体を山積みにして見せしめとするやり方はエンブ社会でのみ行われていたのではなく、まだ非常事態宣言が発令されていない頃のナイロビでも実施されていたようである。これは出稼ぎ中に宣誓儀式を受けたエンブ人の語りからわかっており、死体を山積みにして連行されてきた人びとを脅す方法は早い時期からマウマウの常套手段となっていたようである。

儀式場に連行されてきた人びとは名前を明記し、金銭を払い、服を脱ぐよう命じられる。そして順番を待ち、何らかの血や肉を口にした後、宣誓を取り仕切るリーダーが言う通りの文言を繰り返した。宣誓の文句は組織の仲間として協力することを誓わせられるとともに、この儀式についての口外を禁じられた。この一連の過程を、村中からやってくる人びとが到着する順に繰り返し夜通し行われた。

当時はかなりの回数の儀式が実施されたため、内容の詳細は語る者によって異なってくるが、儀式が恐怖で支配されていたことはおよそ皆同じであった。

宣誓儀式に関するエンブ人の語りで興味深いことはキクユ人と異なり、ほとんどが儀式の内容を口外することを恐れず、躊躇なく筆者に語ることである。前述したとおり、通常マウマウの宣誓儀式では、誓いを破って第三者にそのことを語れば、その後自分の身に不幸が起きると信じられている。それゆえ彼らは儀式の内容について語ることはしない。それにもかかわらず、エンブ人がまったく抵抗なく筆者にその出来事について語るのは、彼らが儀式において呪術的要素を全く感じていなかったからである。言い換えると、マウマウがエンブ社会で行った宣誓儀式が雑だったということである。

エンブ社会で宣誓儀式を乱発したのは政府の厳重警戒の最中であり、供儀となるヤギを調達するだけでも大変であった。宣誓儀式を受けた語り手が言うには何の血なのか、何の肉なのかわからないものを口にさせられたようであり、ヤギ以外のものがあった可能性もある。なかには儀式中、見せしめに殺した人間の血を宣誓中に飲ませられることもあった。また儀式は政府

の取り締まりを恐れて、夜中実施されたため、受け手はほとんど何も見えなかった。通常儀式で見られるようなバナナの葉でつくったアーチもなく、何も見えない、何もない、そのような中で行われる儀式には彼らが慣れ親しんできた儀式との共通点を見出すことができなかった。ただし、宣誓を拒否して殺された山積みとなった死体のことは多くの人びとが語っていたことから、これは見えるように灯りが灯されていたものと考えられる。

マウマウの宣誓儀式はエンブの人びとにとって「伝統的儀式」とは認識されていなかった。しかしそれにもかかわらず、宣誓を受けた人びとがマウマウに従ったのは、もちろんその呪術的力を恐れたからではない。単純に目の前のマウマウに恐怖を感じており、彼らに逆らうことはできなかったというのが理由である。そのような意味では、儀式自体は雑であったが、マウマウのエンブ人の支持を得るという最大の目的は達成しえたと言えよう。マウマウはこのようにしてエンブ全民族を植民地政府との対決に引きずり込んだのである。

5. ンジャゲの語り

ここまで宣誓について論じたが、これらは第1章であげたマウマウの宣誓に関する噂とは異なる。よく混同して論じられるが、宣誓にも種類があり、前章の宣誓儀式は、いわゆる「受動派」の宣誓である。この区別は植民地政府によるものだが、マウマウは基本的に戦闘に関わる「戦闘派(active wing)」と彼らをサポートする「受動派(passive wing)」に大別される。当時、理解を超えるものとしてセンセーショナルな話題になったほとんどの儀式は戦闘派の宣誓儀式である。複数の呼び方があるが、多くは「バトニ(*batūni*)」の宣誓と呼ばれる。これは大隊という意味の英語「バタリオン(*battalion*)」がキクユ語に定着する過程でなまったものだとみなされている。エンブの受動派の宣誓は例外として、基本的に宣誓は呪術的世界観のもとで実施され、儀式の受け手は呪術的力に拘束される。戦闘派は受動派以上に念入りに儀式が実施されるため、儀式について第三者に口外することはほとんどない。ただし植民地政府の浄化の宣誓をアフリカ人もまねるようになったのか、自ら宣誓した言葉の力に縛られないよう浄化する儀式を執り行うことがあった。

筆者のなじみのインフォーマントであるンジャゲ(仮名)も戦闘派の宣誓を受けたが、浄化の宣誓を受け、その拘束から解放されていた。それゆえ本来ならば語るができない森の内部のことも筆者に語ってくれた。ンジャゲの正確な年齢は不明だが、筆者が聞き取りを行った2009年はおよそ70歳代前半である。スラム地区に住んでいるわりには他の住人とは異なり、

奉仕の精神が強いのは、彼自身がプロテスタント系キリスト教の牧師であるからだろう。彼とは筆者が現地調査を始めるようになった初期の頃からのつきあいで、マウマウ戦争に限らずエンブ社会に関する多岐にわたるテーマにおいて協力してもらっていた。筆者に森のマウマウに関する詳しい情報を話してくれるようになったのは知り合いになって4年ほど経った2009年以降であり、下記は2月23日、2月28日に聞き取りを行ったものである。

まず筆者がンジャゲにマウマウの宣誓に関する噂について尋ねると、彼は次のように答えた。

「多くの元マウマウ戦闘員たちはそれを否定するだろう。しかし私は正直に言おう。その噂は事実である。私は決してその宣誓が正しいものであったと言うことはできない。間違っていたと思う。ただしそれはキクユの人びとがやっていたことである。私はやっていないが、もっと長く森にいらしていたら、私もしていた可能性はある。」

そう言って彼は話を続けた。ンジャゲがマウマウ戦闘員になることを決意したのはまだ10代の少年の頃だった。戦時中、「新村」で生活を強いられていた時、父親が夜中「新村」から逃げた家畜を捕まえようとした。それをマウマウの侵入と勘違いした警備兵が銃砲を向け、彼は射殺された。父親を失ったンジャゲ少年は「新村」を去り、マウマウのいる森に入った。

当時のエンブ地区のマウマウ組織には3人の将軍がおり、セクション6にはンガンドーりに配置されたカイロ将軍²¹⁾、セクション7にはカガーリを守る将軍、セクション10にはガトーリを担当したクブクブ将軍がエンブのマウマウ戦闘員をまとめていた²²⁾。

ンジャゲが森に入ればらくすると、戦闘派の第一の儀式である「森の宣誓」を受けることになった。森には彼と同じように戦闘派になることを志願する10代の少年が6人おり、彼らと一緒にさらに奥深い森へと向かった。そこでンジャゲ少年はマウマウ戦闘員が獣と性交をしているのを見た。

儀式場に到着すると、服を脱いで儀式に臨むように言われた。儀式での宣誓はエンブ語で唱えられた。「黒人の誓いは白人によって変えられるものではない。たとえ私が死のうとも。私はケニアの土地を守るため、死ぬ準備はできている。」などと述べ、仲間を敵に売らないこと、土地を奪還すること、白人を殺すこと、マウマウの仲間にならない親兄弟は殺すことなどを誓った。誓いの言葉が終わると、モゲルウェ (*mügerwe*) という木で作られたアーチをくぐり、リーダーから与えられた血と肉を口に含ませた。それらは犬と猫、そして人間の血と肉が混ぜ合わされていた。儀式が終わると、リーダーから「これで君たちは森の一員だ。森で獣と

交わることを許可する」と言われた。ンジャゲはこれを「リーダーから与えられた『愛』」だと説明した。

彼はそれから森にいら続けたが、バトニの宣誓で女性と性交する儀式を先輩格の戦闘員が受けていたのを見ていたと語った。筆者がそれはキクユだけの秘儀だったのではないかと質問すると、彼は口を閉じてしまった。筆者はそれ以降もンジャゲを訪ねることはあったが、この話について質問することはなかった。

ケニアでの長期調査がなくなっていた2015年、再びマウマウに関するテーマで調査を行う機会を得た。戦争を経験した筆者のインフォーマントの多くが逝去していたが、ンジャゲは健在であった。もう一度、森でのことについて語ってもらうために、2015年8月11日、8月17日の2回ンジャゲを訪ね、前回の語りの確認から聞き取りを行った。すると前回とは異なり、ンジャゲは森では戦闘員が獣と交わることなどなかったと答えた。

筆者との問答の中で、バトニの宣誓はリーダーとなる戦闘員が受ける宣誓儀式であり、彼もそれを受けたと答えた。また森の中の生活に関して、若い女性も森で生活していた。彼女たちはスワヒリ語で「マラヤ (*Malaya*)」と呼ばれていた。現在は売春婦という意味で用いられているが、当時は金銭の授受とは無関係に、複数の男性と性交する女性を意味していた。ンジャゲは当初、若い女性たちは自ら望んで森にいたと語っていたが、しかし事実確認を続けながら質問を続けると、嫌がる女性たちを強制的に連行していたことを認めた。ンジャゲたちマウマウ戦闘員は2~3週間ごとに下山しては3~4人の若い独身女性を森に連行していた。監督者がいないところで若い女性が一人でいるところを見つけると、拉致目的で近づき、この場で死ぬか、それとも森に自分たちと行くか、二者択一をせまされた。もちろん若い女性は恐怖で森に行くことを選ぶ。たまに森に行くことを拒否する女性もいたが、その場合殺された。森では若い女性たちはしばらくすると妊娠する。妊娠したら森を去ることになるため、それゆえにマウマウは常に若い女性を「補充」しなければならなかった。若い女性が戦闘員たちにとって必要だったのは、彼らの性的な慰めと、そしてバトニの宣誓儀式での役割ゆえである。

バトニの宣誓ではまず受け手は裸になり、人間の血肉を食べ、そして女性と性交する。しかし重要であるのは、口に人間の血、人間の肉、性交する女性など、儀式に捧げられる人間の出自であり、キクユ人、エンブ人、メル人のいずれかに限られていた。「白人を供儀とすることはしないのか」と筆者が尋ねると、ンジャゲは「それは意味のないことだ」と答えた。儀式にはそれを実施する目的と意味があり、儀式を通じて、

受け手はキクユの始祖であるムンビの息子になるのだとンジャゲは説明した。

キクユ、エンブ、メルそれぞれの先祖をたどると、もとは同じだと言われている。つまり、キクユの始祖と言われているムンビこそが3民族の始祖であり、儀式を通して、もう一度3民族に分かれる前の同一の仲間に戻ろうとした。儀式の受け手はムンビの血と肉を受け継ぎ、そしてムンビの子孫である女性と性交することで完全にムンビの息子に生まれ変わるのである。「これがバトニの宣誓だ」とンジャゲは語った。

ンジャゲはそれまでの聞き取りで、噂で言われるようなマウマウの宣誓儀式は見たことや聞いたことはあるが、自分自身は受けていないというスタンスを固持していた。しかしいくつもの応答の中で、矛盾する語りが気になったため、「あなたはバトニの宣誓を受けたと最初におっしゃった。それならば本当はあなたもムンビの息子に生まれ変わる儀式を受けたのではないですか?」と尋ねると、ンジャゲはしばし筆者を凝視して、それからおもむろに「そうだ」と一言答えた。

ンジャゲは非常に協力的なインフォーマントであったため、会話時間はおよそ1回につき3~4時間とることが普通であった。彼は2009年の語りにおいて、森では獣との性交を許されており、それはリーダーからの「愛」だと語っていた。ところが2015年の聞き取りでは、獣との性交がリーダーから許可されたことなどないと、前回の語りを否定している。6年も経ってから行った聞き取りであり、事実確認において多少のずれはよくあることである。しかし森での出来事は日常ではなく、記憶に残りやすい経験である。獣姦という行為自体も、性衝動をもてあました男性がたまに若気の至りですることであっても、エンブ社会で一般的に許容されていたわけでもない。ンジャゲの2009年の発言はただの勘違いというのではなく、意識して発せられた語りである可能性がある。そのような意味では彼の語りはさまざまな解釈が可能である。2009年の聞き取りでは彼は正直に事実を語ってくれており、2015年には思うところがあって、それを否定したという見方もできるだろう。もしくは2009年の獣姦のストーリーは本人の女性との性交を隠す盾となる嘘であったという解釈も可能である。

本稿では文字だけでンジャゲとの語りを伝えており、彼との会話のすべてを伝えることはできない。実際のンジャゲとの会話では、彼の表情、彼がとる間がリアルに展開されており、言葉遊びを楽しむという余裕のあるものではなかった。

聖職者となっていたンジャゲはボランティア精神にあふれ、森でのことを第三者に伝えることは意義あることだと考えていた。しかしその一方、聖職者だから

こそ彼がとった森での行動が語ることを難しくさせていたという側面もあるだろう。聞き取りは穏やかにゆっくり進んだが、最後においてはそこに張りつめる空気があった。筆者の最後の質問に答えた時のンジャゲは秘密にしたかった内容が暴露されたかのような緊張したムードをしばらく漂わせていた。

6. 宣誓儀式のオーセンティシティと創造

マウマウの宣誓儀式について、第1章で指摘した噂についての議論をもう一度見直そう。

カリウキやチャイナ將軍など、噂になった儀式はキクユ人が実施する一般的な儀式とは異なるため、事実ではないとみなした。しかし、そもそもマウマウはキクユの伝統や慣習に忠実だったわけではない。儀式において箇所個所にキクユの伝統らしきものが見られるが、マウマウは従来の考え方に背いてでも、自らを組織化し、植民地政府を追放して土地を奪還したかった。敵であれば親兄弟を殺すようマウマウは人びとに宣誓させるが、それはキクユの人びとが代々受け継いできた考え方とは異なる。当然同じキクユ人でもマウマウに対しては多くの反発があったが、それをマウマウが力でねじふせてきたのである。マウマウの宣誓儀式とキクユの「伝統的」儀式は関連はあっても、別のものとみなすべきだろう。

また、オーセンティシティの問題もあるだろう。儀式を受けた経験者たちは皆、自分の受けたものこそが本物のマウマウの宣誓儀式だと主張する。しかしそこに本物と偽物があるだろうか。

宣誓(oath)の起源をさかのぼってみると、1914年の記録では宣誓は神判(ordeal)のなかで実施されており、組織を結成するために使われてはいなかった²³⁾。それが西欧との出会いで宣誓は神判から独立し、政治結社の結束に用いられるようになった。マウマウの宣誓に関して言及すると、それにつながる儀式が初めて発見されたのは1944年であった。通常キクユ社会において、宣誓は年配の男性のみが執り行っていたが、1946年までには若い男性、女性や子どもも宣誓を受け、最終的には戦闘員用の宣誓が誕生し、リーダーが定める命令に従わない者には死を与えるような儀式となった²⁴⁾。宣誓の内容は常に変わり続けており、つまり宣誓は西欧と出会い、植民地政府と対峙することでそのスタイルを時代とともに変えていったのである。

マウマウの宣誓儀式は植民地政府と対立しながら驚くほど多様なスタイルを生み出し、各地に広がっていった。マウマウはそれまでの既成概念を打ち破って成立した組織である。そして組織が巨大化すればするほど、それに伴って個別に実施される宣誓に創造性が付加されたり、オリジナルなるものから離れていったり

した。

エンブの宣誓儀式に呪術性が欠落していたこともその一つであるだろう。また「新村」ができると、儀式の供儀に一般的に用いられるヤギなどが入手できなくなったことから、ンジャゲの部隊では犬や猫を代用として儀式に使っている。犬や猫は従来は儀式にほとんど用いられたことはないが、人びとの「財」となる家畜ではないため、「新村」の中で保護されず、マウマウにも簡単に入手できたのである。当時のそのような制限された状況が儀式の内容を変えたのである。

マウマウに中央集権はなかったが、各部隊同士、情報は交換していた。マウマウにおけるキクユの優位性が見られる中、エンブでもキクユから伝わる秘儀として儀式で性交することを率先して取り入れたと考えられる。ただし各地で行われる儀式の内容は地域性や民族性が見られ、例えばンジャゲが語るマウマウの宣誓はいかにもエンブらしさが見られる。儀式を通してエンブ人がキクユ人の始祖ムンビの息子に生まれ変わることで、同胞として植民地政府に戦いを挑むことができるようになった。エンブ人にとってマウマウ戦争は長年の彼らの不満が爆発して起こした戦争というわけではない。キクユから伝播してきた戦いである。参戦したものの、何のために命をかけるのか、エンブ人にとってわいたその疑問が、最終的に彼らオリジナルの儀式をつくりあげたと考えられる。

また、行政文書において宣誓儀式で最も「野蛮(bestial)」であったと記述があったのはメル人が執り行うものであった²⁵⁾。「野蛮」という表現は植民地政府によるものであるが、3民族社会各地から送られてくる報告の中でもメルにおける儀式がより衝撃的な内容を伴うものだったのだろう。マウマウ運動の盛り上がりはキクユが中心であるが、続いてエンブ、その次がメルである。メルは地理的にもキクユから離れており、おそらく儀式の手法が伝えられる過程で、他社会で実施されている儀式と比べてより創造性が増したのではないかと考えられる。

変化に富む宣誓儀式に、植民地政府も驚きを隠せない。政府は最初の頃の儀式に対しては、住民による多くの苦情が寄せられたこともあり、問題視していた程度であるが、非常事態以降の宣誓儀式はどんどん過激化していき、記録では、宣誓儀式は受け手の人格を変え、不気味で恐ろしい戦闘員に仕立て上げるものとみなされていた²⁶⁾。偏った見方ではあるが、そもそも儀式の目的は受け手の意識を変えることである。マウマウ戦闘員は儀式を通して植民地政府の猛攻に耐えうる勇敢な戦士になるのである。戦闘員が受ける儀式は誰も干渉しない森の中、小さな部隊の仲間内でやる儀式である。生きるか死ぬか、厳しい状況に置かれている

戦闘員たちの宣誓の内容が、戦局が厳しくなるごとに刺激的なものになっていったのは戦いに勝つための彼らの秘策だったとも考えられる。

宣誓の様式は歴史や時間の経過とともに変わる。オーセンティシティは通時的観点から見てもないが、共時的にみても唯一の本物と言えるものなどない。それというのも組織自体が統一されていなかったからである。多少あるように見えた中央機関も指揮系統は常に混乱していた。組織全体の自称がないのが何よりもその証拠であろう。一部では「ケニア土地自由軍」が組織の本名の総称だとみなす論者もいるが、エンブではそのような名称は全く使われていない。エンブ地区のカイロ将軍ですら知らなかった名称である。カイロ将軍の部隊では「急げ、急げ」という意味の「ヘカヘカ(Hika Hika)」という名で自らの部隊を呼んでいた。「ケニア土地自由軍」「ヘカヘカ」などの名称は植民地政府の記録に記載されており²⁷⁾、皮肉なことだが、マウマウ内部の人間より植民地政府の方が組織の全体像を把握していた。戦い方、規範、秩序、服装などは部隊によって異なり、統一されたものはない。つまり、宣誓儀式が部隊ごとに様式が異なっていたと考える方が自然であろう。

このように宣誓儀式一つをとっても唯一の本物ではなく、言葉を変えるならば、すべてが本物の宣誓儀式であったと言える。つまり、噂の元となったマウマウの宣誓儀式に関する行政文書の内容を捏造とみなすもつともな理由は何一つない。むしろ手がかりとなる出来事をなかったことにするのではなく、『マンチェスター・ガーディアン』紙でマックス・グラックマンが論じたように、なぜ彼らがそのような儀式を実施するに至ったのか、それを探求することが重要であるだろう。

おわりに

筆者がエンブ社会から得られたデータをもとにマウマウ戦争に関する研究発表をするにあたって、多くの批判があった。目立った批判が、植民地主義を復活させるような議論だという意見であり、特に現地の人びとの名誉を傷つけるような研究をすることにどんな意味があるのだと言われることが多かった。折しもマウマウ・フィーバーの最中であり、筆者の議論は「マウマウ英雄論」に水を差すものとみなされていたようだった。

マウマウの宣誓儀式に関する語りは驚きはあるものの、彼らの生の営みと結びつけると理解可能なものかと思っている。しかし日本に帰国し、データをまとめて発表する過程で、彼らの現実を翻訳して語ることの難しさがあった。筆者のその拙さがそれを見たり聞いたりした人びとに誤解を与えてしまったのではないか

と思う。

ただ、一つの喚起として、日本人は西欧のオリエンタリズムに苦しんできた経緯をもつが、ここで語られた内容に関して、それを「恥」だとみなしているのは誰かということも問いたい。オリエンタリズムを排すべき立場にいる者がいつの間にか「オリエンタリズム的西欧人」になっていないだろうか。

マウマウの宣誓儀式を、筆者があえてテーマにとりあげたのは、一つには一般的には入手できない宣誓儀式の語りという一次資料を比較的多くもっていたからである。しかしそれ以上に、マウマウ・フィーバー以降、一層固定化されたマウマウ戦争に関するパースペクティブを少しでも開かれたものにするための一つの切り口としてこのテーマを選んだ。マウマウ戦争に関連する一つ一つの出来事にはいまだ多くの解釈の余地と可能性を秘めている。常時ならざる時の人間の行動の研究は世界の知見に貢献する。一見見たくない現実であっても、そこに学ぶべきものが隠されているのであれば、私たちはそこから目を背けるべきではないだろう。

謝辞

筆者のケニアのすべてのインフォーマントと歴代の調査助手、そして毎回の居候先であるエスターとバンシー姉妹とそのご家族に感謝申し上げます。また、諦めていたマウマウ戦争調査の続行を促し、その機会を与えていただいた京都大学の松田素二先生に感謝とお礼を申し上げます。

本稿にかかわるケニア共和国エンブ県における現地調査や研究は日本学術振興会・特別研究員奨励費（平成 18・20 年度）、公益信託澁澤民族学振興基金（平成 21 年度）、高梨学術奨励基金（平成 22 年度）、東海ジェンダー研究所個人研究助成（平成 22 年度）、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」研究代表者：太田至、2015 年度派遣（平成 27 年度）によって可能となった。特にマウマウ戦争に関する報告が遅くなったことをお詫び申し上げます。

註

- 1) ケニアは 42 民族で構成されており、キクユはケニアの最大民族である。エンブとメルはキクユと文化的、言語的に共通点をもつ近接民族である。
- 2) 「新村計画」とはマウマウ運動が盛んな地域に「新村(new village)」という要塞化したムラを設置し、マウマウと支持者の協力関係を断つ大規模作戦である。

新村はキクユ全域、エンブ全域、メルの一部とナイロビに建設され、周辺の村人たちはそこへ囲い込まれた。これはゲリラ封じとも呼ばれるものであり、植民地政府のこの作戦によってマウマウは協力者を失い、最終的に敗北することになった。

3) 穏健的な改革を提唱していたケニヤッタは実際は急進的改革を謳うマウマウ運動には直接かかわっていない。マウマウは彼の知名度を利用して規模を拡大させており、それゆえ現在でもケニヤッタがマウマウのリーダーの一人だと信じるケニア人は多い。

4) The British National Archives, CO822/ 800.

5) Ibid., Manchester Guardian (1954 年 5 月 10 日)

6) Ibid., Manchester Guardian (1954 年 3 月 19 日、5 月 26 日)

7) Kariuki, J.M. (1963) *Mau Mau Detainee*, Oxford University Press, p. 33.

8) Itote, Waruhiu (General China) (1967) *“Mau Mau” General*, East African Publishing House, pp.283-284.

9) La Fontaine, J.S. (1985) *Initiation: Ritual drama and Secret Knowledge across the World*, Penguin Books.

10) 石井洋子(2007)『開発フロンティアの民族誌—東アフリカ・灌漑計画のなかに生きる人びと』御茶の水書房、104 頁。石井はマウマウの総称を「土地自由軍」とみなして論じている。

11) The British National Archives, CO1066/2. 筆者も閲覧警告のあったこの殺害現場を写真で見たが、凄惨そのものであり、写真は当時のマウマウの恐ろしさを十分物語っていた。

12) Anderson, David (2005) *Histories of the Hanged: Britain’s Dirty War in Kenya and the End of the Empire*, Weidenfeld & Nicolson, London, p. 87.

13) 石井洋子(2007)『開発フロンティアの民族誌—東アフリカ・灌漑計画のなかに生きる人びと』御茶の水書房、104 頁。

14) Haugerud, Angelique (1984) *Household Dynamics and Rural Economy among Embu Farmers in the Kenya Highlands*, Ph.D. diss., Northwestern University, p. 97.

15) Ibid., pp.98-99.

16) エンブは白人に奪われた土地はないが、土地を求めてエンブ社会に移民してくるキクユ人には不満を覚えていた。メルも彼らの土地が奪われたことはほとんどなく、強いてティマウ(Timau)地域のごく一部のみが白人占有地となった。またメルはキクユやエンブのように全民族がマウマウ運動に加入したわけではなく、ザラカ(Tharaka)地域の人びとのみが参加した。cf.

Kamunchuluh, Samuel J.T. (1975) The Meru Participation in Mau Mau. In *Kenya Historical Review* 3(2).

17) Elkins, Caroline (2005) *Imperial Reckoning: The Untold Story of Britain's Gulag in Kenya*, Henry Holt and Company, New York, p. 27.

18) The British National Archives, CO822/ 800.

19) Kamunchuluh, Samuel J.T. (1975) The Meru Participation in Mau Mau. In *Kenya Historical Review* 3(2), p. 201.

20) Anderson, David (2005) *Histories of the Hanged: Britain's Dirty War in Kenya and the End of the Empire*, Weidenfeld & Nicolson, London, p.42.

21) カイロ将軍は筆者が現地調査中も存命であり、筆者の聞き取り調査にも応じてもらった。これに関しては別稿にて報告したい。

22) The British National Archives, WO276/400. 1953年12月の時点ではエンブ地区のマウマウのリーダーはクブクブ将軍を含む9人が認識されていた。そこにカイロ将軍の名はなく、彼はその後将軍の地位に就いた可能性がある。

23) The Kenya National Archives, Political Record Part. III (General)

24) Anderson, David (2005) *Histories of the Hanged: Britain's Dirty War in Kenya and the End of the Empire*, Weidenfeld & Nicolson, London, p. 27.

25) The British National Archives, CO822/ 800.

26) Ibid.

27) The British National Archives, WO276/412. 植民地政府が作成したマウマウの組織図は、アバーデア山地系とケニア山系と、大きく二つに分かれており、ケニア土地自由軍はアバーデア山地系の、またヘカヘカはケニア山系の一軍隊名となっている。